

## 『伊勢物語』初段

むかし男をとこ うひかう初冠ぶりして 平城ならの京きょう 春日の里はるにしるよしして 狩いに往いにけり その里  
にいとなまめいたる女をはらから住すみけり この男おとこかいまみてけり おもほえず 古里ふるにいとほ  
したなくてありければ 心地こころまどひにけり 男おとこの着きたりける狩衣かりぎぬを切りて歌うたを書かきてやる

春日野はるのの若紫わかしずのすり衣ころもしのぶのみだれかぎり知られず

となむ老おいづきてい言ひやりける

ついでおもしろきことともや思おもひけむ

みちのくのしのぶもぢずり誰たれゆるゑにみだれそめにし我われならなくに

といふ歌うたの心こころばへなり むかし人は かくいちはやきみやびをなむしける

## 【私訳】

昔、一人の男がいた。元服式も終えて、昔の都奈良にある領地へ狩に出かけた。その里に、すごく綺麗なかつこいい姉妹きょうだいがいるのを見つけた。

垣根越しに覗いていて、とても古都の田舎にはもったいない姿振舞いなので、男は胸がどきどきした。男は着ていた狩衣の裾を破り、一首認したため書き送った。

(歌意)春日野の若紫の名にふさわしいお二人、若くて美しいあなたがたを見てわたしの心がこの信夫摺しのぶずりのみだれ模様のように乱れております。この乱れ、自分では止めようがありません。と、分別のある男振りを見せようとネ、こんな歌を送ったのだ。

というのは、この歌、あの古歌を下敷きにしたのが、興味あるじゃないか、と思ったのだナ(ヤッコさん)。

(歌意)陸奥みちのくの信夫摺しのぶずりのみだれ模様のように私の心が乱れてしまっています、誰のせいでこんな思いをさせられているのか。私があなた以外の誰かに身も心も任せたとおっしゃるのですか。

— 河原かはらの左大臣ひだりのおほいさま源融みなもとのおと 『古今和歌集』卷十四 恋歌四(724)

これが歌の心こころばえというものだ。昔の人は、こうして素早く機転の利いた「みやび」をネ、発揮したものだヨ。

## 『源氏物語』「桐壺」より

いづれの御時おほむときにか 女御更衣にようごかういあまたさぶらひたまひけるなかに いとやむごとなききは際にはあらぬがすぐれて時ときめきたまふありけり はじめより我われはと思ひ上がりたまへる御おんかたがたまさましきものにおとしめ嫉そねみたまふ 同じほど それより下臈げらふの更衣たちは ましてやすからず 朝夕の宮へにつけても 人の心のみ動かし 恨うらみを負ふ積りにやありけむ いとあつしくなりゆき もの心細げに里がちなるを いやいよあかはずあはれなるものに思おもほして 人のせしりもえ憚はばからせたまはず 世のためしにもなりぬべき御もてなしなり 上達部かんだちめ、上人うへびとなどもあいなく目を側そばめつつ いとまばゆき人の御おぼえなり 唐土もろこしにも かかる事の起りにこそ世も乱れ 悪悪あしかりけれど やうやう天あめの下にもあぢきなう 人のもてなやみくさになりて楊貴妃やうきひの例ためしも引き出でつべくなりゆくに いとはしたなきこと多かれど かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ 父の大納言だいなごんは亡くなりて母北の方なむいにしへの人のよしあるにて 親うち具ぐし さしあたりて世のおぼえはなやかなる御かたがたにもいたう劣らず なにごとの儀式をもてなしたまひけれど とりたてて はかばかしき後見うしろみしなければ ことある時はなほより所なく心細げなり さきの世にも御契りや深かりけむ 世になくきよらなる玉の男御子をのこみこさへ生まれたまひぬ いつしかと心もとながらせさせたまひて 急ぎ参らせ御覧ごらんするに めずらかなるち稚児この御容貌かたちなり 一の御子は右大臣の女御の御腹にて 寄せ重く疑ひなき儲まうけの君と 世にもてかしづききこゆれど この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ おほかたのやむごとなき御思ひにて この君をば私物わたくしものに思ほしかしづきたまふこと限りなし

## 【私訳】

いつの御世みよでございましたか、女御、更衣がたくさん伺候しておられるなかに、それほど身分は高くはないのですが、際立って魅力的で帝の覚えがいい更衣が一人おられました。お仕え始めてすぐに私こそと思いがあっておられた女御のかたがたは、これはけしからぬことと妬みお怒りなされるのであります。女御より身分は低い同じ身分の更衣のかたがたは、ましてや心穏やかではいらませぬ。朝夕あの更衣が帝のところへ行かれるたびに、嫉妬心しやくしゆしんを掻き立て、恨みを募らせ、その恨みが積り積ったとでもいうのでしょうか、かの更衣は病気がちになられ、里へ帰られることも多くなりました。そうなるとなお、ますますいとおしく思われて、帝は、人がなん

と言おうが気にすることなく、世間の噂話にもなるほどにこの更衣を愛されるのでありました。上達部や殿上人なども、横目で睨みながらむやみに咎めはしないが、とても見ていられないほどの溺愛振りだなと思うのでした。

そう言えば、あの唐の国でも女の人が国を滅ぼしてしまう話がありましたっけ。とうとうこの日本でも似たような悪いことが起りそうだと人びとが心配することもあったのであります。楊貴妃と比べられるような話が聞こえてくると、更衣はともいたたまれない気持ちに陥ることもしばしばでしたが、帝のご愛情は変わらずこの上なく、それを心の支えに宮中の暮しを続けておられるのであります。

更衣の父上の大納言は早くに亡くなり、母の北の方はというと古い家柄の出で教養のあるお方でしたから、ご両親が揃っていらっしやっただならば、いまや世間の評判を一身に受けておられるお妃方と肩を並べるくらいにちゃんとした支度の用意もされたでしょうが、父上を亡くされこれといった有力な後見うしろみもおられなくなりましたから、宮中の儀式があるときなどは、頼る方もなく、とても心細げでございました。

前世ぜんせいからの御宿縁ごしゆくゑんとでも申しましょうか、この更衣さまに、この世にこれ以上にはと思われるほどの美しい、玉のような男の御子がお生まれになったのであります。帝ときたら、まだかまだかとお待ちになり、御誕生を知ると急ぎ宮中へ参上させ、御子を眺められるのであります。赤ちゃんの御姿御顔はなんとたとも譬えたとえようがありません。第一皇子さまは、先に右大臣の娘の女御からお生まれになり、後見も堂々、申し分のない儲君ちよくん（皇太子）として、世間でも皆大切にしておられはいたしますが、その美しさときたら並ぶくらべようありませんでしたから、帝ときたら、この皇子には通りいっぺんの慈しみかたをされるだけで、このたびの更衣の御子には、それはもうどこにも手放したくない大切な宝のように可愛がられ、尽くせる限りの愛情を注がれるのであります。